

## プレスナーの哲学的人間学における位置性の理論(6)

奥 谷 浩 一

---

### 要 旨

プレスナーの哲学的人間学は、シェーラーから大きな影響を受けながらも、シェーラーとは相対的に独立の道を進んで、仕上げられた。それは、生物学から哲学に転向した彼の経歴にふさわしく、当時の生物学の専門的な知識を駆使して展開されており、その議論はしばしば高度の専門性に達している。そしてそれは、生命世界と生命現象の全体を、生命あるものが周囲環境に対して取る位置形式という観点から一貫して追求しようとした点で、確かに前例のないものであった。またそれは、シェーラーのあの有名な『宇宙における人間の地位』が現れたその同じ年に、人間の本質および人間と動物の本質的差異を、生命世界を超越した「精神」の原理に求めるといようなシェーラーの形而上学的な人間学を最初から超え出て、これらの諸問題を生命世界の内部でのみ探究しようとして登場したのであって、この事実はもっと高く評価されてよいであろう。生命が境界と二重アスペクト性を持ち、植物が周囲環境に開放的、動物が閉鎖的であるのに対して、人間が脱中心的であるという彼の理論も、現在なお有効な射程をもつ思想であると評価されよう。

しかし他方では、それは、方法論においては、生物学という経験科学の素材を扱いながら、経験を可能にする条件としてのア・プリオリなものに固執するという不整合に陥っているかに見えるし、構成主義・演繹主義の要素も無視しえない。また、当時の生物学の時代的な制約と関係して、植物を動物の「下位」に位置付けたり、人間と比較した場合の動物の限界を、空間・時間的な〈ここー今〉への埋没、あるいは否定的なものに対する「感覚の欠如」と規定するなど、今日の比較認知心理学では証明できないような主張や進化論に対する否定的態度をも含んでいたことも、大きな弱点であったといえよう。また、人間の「脱中心性」概念にもいくつかの問題点が含まれている。それは動物の「中心性」からの移行の可能性をもたない固定的なもので見なされている。そして、人間が「脱中心性」という位置形式をもつがゆえに、自我と自己意識を持ち、内面性の背後に「消失点」または「眺望点」をもつことを可能にしたというプレスナー人間学の根本テーゼも、むしろこれとは逆の方向で、つまり、人間が進化の過程のなかで獲得した大脳化とその所産としての自己意識が人間の「脱中心性」を可能にしたと考える方が合理的であるように思われる。以上のように、総括して始めて、プレスナーの人間学思想にたいする全体的評価が可能になるであろう。

キーワード：境界、二重アスペクト性、中心性、脱中心性、人間学主義

## 目 次

第1章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(1)	(第66号掲載)
第2章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(2)	(第68号掲載)
第3章 生命性の現存在様式と位置性	(第70号掲載)
第4章 開放的形式をもつ生命としての植物の位置性	(同 上)
第5章 動物の位置性としての閉鎖的形式	(第72号掲載)
第6章 人間の領域における脱中心的な位置性	(第73号掲載)
第7章 プレスナーの哲学的人間学の評価をめぐる諸問題	(本号掲載)
(1) プレスナーの哲学的人間学の肯定的側面	
(2) プレスナーの哲学的人間学の問題点	

## 第7章 プレスナーの哲学的人間学の評価をめぐる諸問題

本誌において過去五回にわたって継続してきた、プレスナーの哲学的人間学にかんするわれわれの探究は、本章でいよいよ最終章となる。

本論文ではこれまで、とりわけ生命あるものの位置性というプレスナーの着眼点を軸に、彼の哲学的人間学の課題意識、その方法、その特徴、それらが含む問題点などを考察してきたが、本章ではそのプレスナーの哲学的人間学がどのように総括され、現代的な観点から見てどのように評価されるのかを考察して、論文全体のまとめに代えたいと思う。本章における総括と評価は、以下のように、プレスナーの哲学的人間学の肯定的な側面、そしてプレスナーの哲学的人間学に含まれる問題点というふたつの観点から行われる。このように考察して初めて、一方ではきわめて難解で哲学と生物学のいずれの分野からも初学者の容易な接近を許さないかに見えながら、他方では生命世界のきわめて広範な分野にわたるとともに高度に専門的な問題提起を豊富に内包した、プレスナーの人間学と哲学的生物学の全体的な評価が可能となるであろう。

### (1) プレスナーの哲学的人間学の肯定的側面

#### ① 生命現象と生命世界全体の哲学的考察

われわれがこれまで検討してきたプレスナーの哲学的人間学は、生物学出身という彼の経歴を最大限に生かして、例えばドリーシュの新生気論の評価、ドリーシュとヴォルフガング・ケーラーの論争、同じくケーラーのチンパンジー実験、そしてフォン・ユクスキュルの動物行動学の先駆的業績にたいする評価など、当時の人間学と生物学をめぐる論争状況を踏まえながら、しばしば生物学の専門的な諸知識を駆使して、しかも生物の哲学的基礎を扱った当時の基本文献を駆使して議論を展開しており、その議論はしばしば高度の専門性に達している。それは、生命現象と生命世界の全体にわたって、生命の本質と定義、生命あるものと生命なきものとの本質的区別、死と老化が生命にとってもつ意味、生命のシステム性格、調和等能性、生殖・遺伝・選択などの諸問題を縦横に論じており、プレスナーの人間学が着眼点や概念装置のうえで

大きな影響を受けたシェーラーの生命哲学に比べれば、その考察範囲の広さと叙述の厳密さの両面においてとりわけ際立っていると評価することができよう。プレスナーの主著である『有機的なものの諸段階と人間』は、当時の発展段階の自然科学と哲学的生物学の状況から見れば、生命の本質と定義から始めて生命世界の全体にわたって、生命あるものに必然的な境界とそれが周囲の環境にたいして取る位置形式という観点から一貫して哲学的に考察した著作として、確かに前例のないものであったといえよう。

シェーラーもまた、自らの哲学的人間学の体系のなかで生命世界と生物の哲学的考察を行っていて、生命一般の本質的な諸徴表として、「対自存在・内部存在」<sup>(1)</sup>を所有し、自己に気づいており、自立性と自己運動性をもつことをあげただけでなく、生命あるものの心的能力と生命世界の段階系列を分析して、植物に典型的に見られる忘我的な傾向性としての「感受衝迫」、下等動物の段階で現れる「本能」、いっそう高等な動物の段階で登場する学習の能力としての「連合的記憶」、そして「実践的知能」の四つをあげたのであった。しかし、シェーラーのこの生命世界の考察と段階系列の分類はきわめて大ざっぱなものであり、その主たるねらいは、生命世界を超越したところに成立する「精神」と生命あるものの心的能力との本質的な対比において生命世界を考察し、生命世界と「精神」との本質的な差異を際立たせることにあったのであり、言い換えれば、シェーラーの生命哲学にかんする考察はそのかぎりにおいてしか必要ではなかったのである。

これに対してプレスナーは、『諸段階』が構想されたばかりの時期にはその当初のタイトルが『植物、動物、人間—生きた形式の宇宙論の初歩』となっていた<sup>(2)</sup>ことで示されているように、植物、動物、人間を互いに切り離すことなく、ある意味ではこれら三者を宇宙と生命世界を構成するいわば構成員と見なしてコスモロジーを展開しようとしたのであった。プレスナーの『諸段階』が、生命現象と生命世界の広い範囲を考察の対象とするとともに、シェーラーのように「精神」という人間の部分機能をこの生命世界から切り離さずに、上記三者の全体領域を横断して構想していること、そして彼が自らの哲学的人間学を「自然の哲学」、「哲学的生物学」または「生物学の論理学」などと言い換えているように、人間の本質を生命世界に内在して把握しようとしたこと、そしてそのために、それがシェーラーのあの有名になったパンフレット『宇宙における人間の地位』が公刊されたのと同時期に、すでに人間学の内容面において、シェーラーの形而上学にきわめて強く傾斜した人間学を克服して登場したことの意義は、もっと高く評価されなければならないであろう。

そして、プレスナーのこうした課題意識から行われる哲学的生物学と人間学の探求は、同じく生物学に内在しようとしながら当時の生物学の発展段階から見ても生物学の最良の成果とは逆行するテーゼを打ち出した、専門の生物学者から見ればいわばディレッタントにすぎないアルノルト・ゲーレンの人間学と比較しても、そしてシェーラー以後のひとつの哲学的思想潮流をなした「哲学的人間学」にぞくするそのほかの哲学者の人間学と比較しても、その哲学的・

生物学的蘊蓄と高度に専門的な議論の両面において、一際光彩を放っているというべきであろう。そしてそれは、その内容に、例えば進化論に対する懐疑的または否定的態度を初めとするいくつかの問題点を含むとはいえ、全体として見れば、生命哲学または哲学的生物学の現代的な展開としては、これからもひとつの模範を提供し続けるということができよう。

## ② シェーラーの人間学の批判

プレスナーの上記のような課題意識と、植物、動物、人間を切り離さずに、自然の哲学または生物学という同一の次元で問題として取り扱い、そのうえでこれら三者の本質的差異を解明しようとする姿勢とは、当然のことながら、生命世界と「精神」とを切り離して後者に人間の形而上学的地位を求めようとするシェーラーの人間論とは一線を画することになる。プレスナーは、ドリーシュとシェーラーが赴任していたケルン大学で一九二〇年に教授資格を取得して、翌年に同大学講師となり、シェーラーは一九二八年春にフライブルク大学へと移転したから、プレスナーとシェーラーとは八年近くも同僚であったことになる。しかし、プレスナーはその間シェーラーから強い影響を受けながらも、相対的に独自の道を通して彼の哲学的人間学の根本モチーフに到達していたのであって、一九二八年に彼の主著『諸段階』が出版された時には、すでにシェーラーの形而上学的な人間論とは異質の、ある意味ではこれに対するアンチテーゼを含んだ独自の人間学体系を携えて、死の少し以前のシェーラーの前に現れたのである。シェーラーがプレスナーを突如として現れた自らのライバルと見なしたのも、ある意味では当然の成り行きであった<sup>(3)</sup>。プレスナーが自らの哲学的人間学の体系を世に問うた時には、それはすでにシェーラーのきわめて形而上学的色彩の強い人間学を、その主要な点のいくつかにおいては、根底的に乗り越えていたからである。

プレスナーは『諸段階』の初版序文のなかで、シェーラーを「今日までこの分野〔哲学的人間学―筆者〕でただ一人仕事をしたあの卓越した研究者」<sup>(4)</sup>と呼び、「情緒問題、個人の構造法則、個人と世界との構造諸連関にかんする彼の研究のなかで、哲学的な生物学と人間学のおはこのテーマとなっている多くの発見を行ったのは、シェーラーの疑う余地のない功績である」<sup>(5)</sup>と述べて、彼を高く評価しつつも、とりわけ現象学の位置付けをめぐる方法論的な議論に異議を唱えている。つまり、プレスナーによれば、哲学的な生物学と人間学の研究の確実な基礎付けをなしうるのは、シェーラーがそう考えたように、現象学ではなくて、カントの批判哲学の理念を拡張したところに生ずるア・プリオリな方法でなくてはならないからである。つまり、プレスナーの主張するア・プリオリな方法にも、後に指摘するように、問題がないわけではないにしても、ここで重要なのは彼の批判が、シェーラーが自然科学の帰納的な経験の方法と対立させて、独自に理解した現象学的方法にもとづいて「現象学的直観」または「本質直観」を哲学的人間学の基礎付けとした点にあることである。プレスナーは、ここで明言しているわけではないにしても、現象学を哲学的人間学の基礎付けと見なすシェーラーの方法的態度が、彼のきわめて形而上学的な人間学の根拠および出所となっている点を見逃すことはなかったの

ある。

そしてプレスナーは、『諸段階』の第二版の序文でもこう述べて、自らとシェーラーとの相違、そして彼に対する批判的な意見を表明している。「著者は、シェーラーが嫌い、彼の流儀にそむくこと、つまり、有機的なものの段階付けをひとつの観点から把握するという試みを企てた。著者がそうしたのは、感情、衝迫、衝動、精神というような、まさに歴史的な重荷を背負わされた諸規定を避けながら、生命ある肉体の特殊な現出様式の特徴づけを可能にするような導きの糸を見つけだし、これを吟味するという意図からであったことに注意されたい。」<sup>(6)</sup> ここでもプレスナーは、シェーラーが「歴史的な重荷を背負わされた」、すなわち歴史的に伝承されながらすでに古臭くなってしまった「感情、衝迫、衝動、精神」などの概念装置を、しかもフロイトに魅せられて汎心理学的な仕方を用いたことを批判している。事実、シェーラーの『地位』のなかでもっとも頻繁に参照されているのはほかならぬこのフロイトの著作なのである。

さらにプレスナーは、ナチによってドイツを追われた後の一九三六年に、オランダのフローニンゲン大学就任のさいに行った演説「哲学的人間学の課題」のなかで、例えばこう述べている。「シェーラーは、まったく失われたわけではないカトリック的伝統から出発して、人間の本性の層序にかんする古い教説を革新した。…シェーラーが生み出したものの特徴は、創造されたものの間の序列秩序にたいする、なかなづく人間存在の明らかな層形成が信用に値することにたいするカトリック的信頼と、一層高次なものの優越した力にたいする近代的な懐疑との間の妥協であるが、この特徴が彼の人間学に歴史的に古臭くなったという刻印を与えている。」<sup>(7)</sup> つまり、プレスナーはシェーラーが基本的にはカトリック的伝統から出発したにもかかわらず、これを懐疑することによってこれから脱出しようとしながら、結局のところこれと妥協するという中途半端を犯したことを批判的に見るとともに、シェーラーの人間論の根本に横たわる矛盾を的確に指摘しているのである。

### ③ 生命の二重アスペクト性の提起

生命と生命現象にかんするプレスナーの議論は、生物と無生物との区別、生命の定義と本質的諸特徴などの諸問題にかんして、しばしば鋭く事実を言い当てているだけでなく、植物、動物、人間のそれぞれにかんしても、当時の生物学の発展段階を踏まえた特徴づけを行っており、現代の生物学と人間学にも十分に有効な射程をもつものも散見される。

生物と無生物、生命あるものと生命なきものにかんするプレスナーの本質的区別は十分な説得力をもっている。例えば、生物であるか無生物であるかを問わず、あらゆる有限な事物は境界をもつが、プレスナーによれば、生物と無生物のそれぞれがおのれの境界にたいしてもつ関係は本質的に異なっている。無生物にとっての境界はこの無生物の周囲を取り囲んでいる媒体が始まる場所で終わり、無生物と境界との関係はまったく外的である。ところが生物は、すべて細胞をその基本単位としているから、生物にとっての境界は自らがもつ生体膜にほかならず、生物はこの生体膜を通じてのみ媒体と交渉する。生物の生体内に取り込まれた直接的な

ものは生体膜によって媒介されたものにほかならない。この意味では、生命あるものは基本的には「媒介された直接性」なのである。

さらに、プレスナーによれば、こうした生体膜の機能に象徴されるように、生命あるものには二重のアスペクト性がそなわっている。つまり、ここに見られるのは、生命あるものは生体膜を通じて外部へと越え出るという関係と、外部から同様に生体膜をつうじて生命体内部へと入り込むという関係とのいわば弁証法的な統一である。さらに、生命あるものには生体膜がぞくしており、生命あるものは生体膜を自らのものとしていわば所有するから、ここにはさらに生命あるものが自らの内部の器官にたいして対向するというもうひとつの関係の可能性が生じている。この第三の関係はやがてとりわけ人間にいたって真に三重のアスペクト性として展開されることになろう。

このようなプレスナーの生命哲学的考察は、生物と無生物との本質的区別と、生命がもつ対立的な諸規定の統一という弁証法的な関係をよく把握したのものとして、そして哲学的な生物学の出発点として、現代にもなお一定の有効な射程をもつものとして、十分に評価されるべきであろう。

#### ④ デカルト的な心身の分離と二元論にたいする批判

近代哲学の父デカルトは、周知のように、物体と肉体とを含む「延長するもの」と「思考するもの」とを、一方の存立のために他方を必要とはしないふたつの有限実体となし、これらを厳然と分離することによって、物心または心身の二元論を哲学の出発点にすえた。このデカルトの二元論は、物体性を等質的な空間的延長へと解消することによって物体を数量的関係として探求しうる近代科学の機械的な自然観を準備したが、他方ではコギト（「我思う」）または精神を人間だけの所有に帰したことによって精神主義と人間中心主義をもたらした。またそれは、物体の自然法則を探求するさいには精神の原理を必要とせず、精神を探求するさいには延長は度外視されるという意味での「二者択一」原理でもあった。プレスナーは、シェーラーとともに、こうした心身の二元論が文字どおり心身の統一そのものを生きる存在としての人間にふさわしくないと断定し、「デカルト主義からの離脱」<sup>(8)</sup>を呼びかけている。

しかし、プレスナーの人間学の根底には、初期のシェーラーの身体論の影響を受けながらも、シェーラーよりもはるかに徹底して、生命あるもの、とりわけ人間における肉体（物体）と身体と心の三者の交差と統一の関係をきわめて広範に考察しようとする試みがあった。シェーラーの場合には、主としてアメリカの行動主義心理学の行動概念に依拠し、これが心身中立の概念であることに着目してデカルト以来の心身の分離と身体の機械論を切り抜けて、きわめて困難な心身問題を問題としてはある意味では回避したのであるが、プレスナーは、シェーラーとは異なり、また彼よりもいっそうプラグマティズムの影響を受けたゲーレンとは逆に、むしろ行動または行為の概念を導入せずに、きわめて複雑で困難な心身関係のただ中に分け入り、生命世界と生命現象、そしてとりわけ人間に特有の肉体（物体）、身体、心または精神が織り

成す統一と交差の複雑な三重の関係を徹底して析出しようとした。このこともまた、フランスの哲学者メルロ＝ポンティと並ぶ業績<sup>(9)</sup>として高く評価されよう。

#### ⑤ 生物と周囲環境との位置関係への着目

これまで詳論してきたように、プレスナーの人間学の着手点は、「生命ある肉体の特殊な現出様式の特徴付けを可能にするような導きの糸を見つけだす」ということにほかならなかったが、プレスナーは上記の生命の本質的規定を踏まえながら、まさしくその必然的な帰結として、生命あるものがその周囲の媒体または周辺領野にたいしていかなる位置を取るかに注目する。ここでプレスナーは、植物的生命が中枢神経系を欠くために周囲環境にたいしてはおのれをこれに委ねて開放するという開放的形式を取り、動物的生命が、中枢神経系とそれがゆえの刺激に対する反応の行動図式を高度に発達させて、周囲環境に対しては自己を閉鎖して誘引と逃避というかたちで環境に応答するという意味で閉鎖的および中心的な位置形式を取るのに対して、人間もまた中心性をもちながらも、動物が周囲環境に束縛されて身動きが取れないという制約を打破して、周囲環境から離脱して行動しようという意味で、脱中心的な位置形式を取ると主張する。

プレスナーの人間学の根幹とも言うべきこの位置性の理論には、先例がないわけではない。植物がおのれの栄養環境にたいして開放的であり、動物が閉鎖的であると述べたのは、プレスナーの師の一人であるドリーシュであるし、動物の中心性・閉鎖性という考え方に動物行動学的な基礎づけを与えたのは、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルであった。しかし、プレスナーの新しさと独創性、そしてとそれゆえに内包せざるをえなかった一定の問題点は、この位置形式という唯一の着眼点から、植物・動物・人間の本質的区別を見ようとしたことにある。これらの考え方にもとづくプレスナーの位置性の理論には、後に示すように、これら三者の間に移行や中間の存在がありうる可能性を否定しないかぎりにおいては、そしてこれらの特徴付けがそれぞれの本質的な断絶にまで先鋭化されないかぎりにおいては、おおよそその特徴づけとして見れば、確かに一定の生物学的事実を言い当てていると言えよう。

#### ⑥ 人間の脱中心性概念の提起

人間の脱中心性というプレスナーの中心概念も、もしそれが、動物が人間との比較においては例えば生活の営みにかんして時間的・空間的な〈ここ一今〉に限定され、過去へと遡及したり未来へと思いを馳せたりすることが少なく、行動において身体的な運動機構や本能によって規定されて意識的な行動が乏しく、「身体であること」と「身体をもつこと」との分離と、それゆえの前者から後者への、また後者から前者への視点の転換が問題になることが少なく、周囲世界のあらゆる事物が自らの中心点へと関係することを知りながら、この関係の中心から脱却しようる能力に乏しいことを表現しようとするかぎり、その限定されたかぎりにおいては一定の生物学のおよび人間学的意味をもつといえよう。

プレスナーは『笑いと泣き』のなかで、「人間が身体であると同時に身体を物（体）として

もつ」という、人間と身体との脱中心的なかわりが人間現象の基礎にあると述べながら、脱中心性のカテゴリーの利点についてこう展開している。それは、一切の解釈を控えた中立的な概念であること、生物一般がわれわれに要求する視点の転換にも無関心ではないこと、人間を物的または心的・精神的カテゴリーで規定しようとする誘惑から身を守ってくれること、「身体的な世界内存在」を表現しうる概念であること、この概念から言語・道具使用・衣服・宗教心・社会形成・権力の拡張・芸術などの人間特有の本質的諸特徴が展開されることである<sup>(10)</sup>。われわれは、後に述べる理由から、人間学主義または人間学還元主義の危険が含まれている点で、これらの主張のうち最後のテーゼだけは保留せざるをえないが、そのほかの点ではいくつかの肯定できる要素があることを認めるのにやぶさかではない。

ここで想起されるのは、ジャン・ピアジェの発達心理学の学説においても、中心化から脱中心化への進展、言い換えれば自我中心から自我相対化への進展が人間の発達を特徴づける基準のひとつとなっていることである<sup>(11)</sup>。ピアジェとプレスナーの脱中心性概念がその意義と内容において必ずしも同一とはいえない側面をもつとはいえ、プレスナーの脱中心性の概念もまた、それが一定の限界内で用いられるならば、そして人間現象のすべてをこの概念から演繹しうるという還元主義的誘惑に陥らないかぎりにおいて、それなりの哲学的な有効性をもつと評価されよう。

#### ⑦ 人間特有の諸現象にかんする現象学的分析

プレスナーはとりわけ、人間が肉体として、肉体のうちにあるとともに、この肉体を身体として所有してもいる存在と見なす基本的な見方から出発して、人間的な諸現象を、これらが交差しあうところに成立する複合的な諸関係の統一として分析した。プレスナーのこうした人間の諸現象にかんする分析の好例は、例えば彼の最初に成功した著作『笑いと泣き』における「笑い」と「泣き」の現象学的分析に見られるとおりである。プレスナーの哲学的概念としての「脱中心性」と人間特有の三重のアスペクト性を初めとする概念装置は、ここでその有効性を十分に発揮することになった。そこでプレスナーは、例えば人間特有の現象とされる「笑い」と「泣き」は、人間が言語や行為などによっては表現しえない限界状況下におかれた時に、人間の人格に代わって身体が特有の身体的な反応を行うことによって生ずるとして、こうした諸現象の人間的な本質を見事に把握して見せたからである<sup>(12)</sup>。プレスナーの哲学的人間学の大きな貢献は、上記の例に見られるように、人間が身体と心と精神または自己意識とを統一する複合的な諸関係と見なして、人間のうちではそれぞれの側面が自立しながらも交差しあうことによって統合されているという基本的な人間観を提示して、これを人間特有のさまざまな現象の哲学的な分析に適用したところにあるといえよう。

#### (2) プレスナーの哲学的人間学の問題点

しかしわれわれには、プレスナーの人間学は、その優れた人間学的観点と着想の提起にもか



かわらず、同時にいくつかの重要な問題点をも含んでいるように思われる。本論に先立つ諸章のなかで折りにふれて指摘したことにもとづきながら、その主要な問題点と考えられるものを総括的に以下に列挙してみよう。

### ① ア・プリオリなものへの方法論的な固執

すでに本論文(1)の第1章で展開した<sup>(13)</sup>ように、プレスナーの哲学的人間学の方法論の特異な点は、解釈学と、哲学の基礎づけとしての役割を振り分けられないかぎりでの現象学とを併用しながら、シェーラーと大きく異なって、プレスナーが生物学という経験科学の範囲内に入り込みながらも、経験科学を超えたア・プリオリなものに固執していたことである。このことは同時に、プレスナーの人間学を必要以上に難解なものとし、専門の哲学者以外の研究者の接近を阻んだ大きな理由のひとつをなしている。

彼のこうしたア・プリオリなものへの固執は、プレスナーが当時、ゲオルク・ミッシュの影響を受けながら、デイルタイによって基礎づけられた解釈学が自然科学と精神科学とを統一する可能性をもった方法であると見なして、そのうえにこの道をいっそう確実に進んでいくための手段として現象学的方法をも位置付けただけではなくて、さらにカントの認識論を拡張しようとして例えば「有機的本質諸徴表のア・プリオリな理論」をめざしていたことにかかわっている。つまりプレスナーは、生物学的諸素材を広範囲に取り扱いながらも、経験的な方法によらずに、生物学的経験を可能にする条件としてのア・プリオリなものに注目しようとした。例えば、本書に示したいくつかの図式は、プレスナーによれば、「生命現象の(原因)ではなくて根拠」<sup>(14)</sup>であり、生命現象とその経験を可能にする根拠または条件であって、ア・プリオリなものそのものにほかならない。

しかし、本論文(2)の第2章で述べたように<sup>(15)</sup>、事例Ⅱの説明で明らかになったことは、プレスナーは、経験的な方法によらないと言いながら実際は、生命現象の基本的な単位である細胞とその周囲環境との相互関係を念頭に置き、この関係から、生命体が生態膜によって外界から自己を閉鎖するとともに自ら境界づけを行い、そのうえで外界との相互交渉を行うという生命活動の論理的な形式を取り出しているということであった。したがって、事例Ⅱは生命と外界との相互関係を前提とし、これを思い浮かべながら、論理的に分析することによって析出された形式的な関係であると理解すべきであって、プレスナーが言うように、この関係をア・プリオリなものとして解釈したうえで、これを前提して初めて生命現象が構成されると理解するのは、現実と理論との関係を反対に描くことであるように思われる。もともと経験科学である生物学の領域で、しかも生物学的素材を扱うかぎり、そこには何らかのかたちで経験的な諸要素が入り込んでこざるをえないのであって、それにもかかわらずア・プリオリなものに固執するというプレスナーの方法論は、ただでさえ難解な印象を与えるだけでなく、現実に即した方法とはいえないであろう。言い換えれば、経験科学にほかならない生物学の内部で経験によらない生物学的ア・プリオリなものを問題にすること自体が深刻な逆説を含んでいるように思われるの

である。

このことと関連して、われわれにとって気になるのは、プレスナーが例えば『諸段階』の冒頭に掲げたモットーとして、アレクサンダー・フォン・フンボルトがシェリングにあてた次のような手紙の一節を引用していることである。「自然哲学は、決して経験的諸科学の進歩にとって有害であってはなりません。その反対に、自然哲学は、新しい諸発見を基礎づけると同様に、発見されたものを諸原理へと帰着させるのです。そのさいに、頭脳の力によって化学を推進することが、自分の手をぬらすことよりも楽なことだと考えるような部類の人間が生まれるとすれば、それは、決してあなたの責任でもなければ、自然哲学の責任でもありません。われわれのところの粉屋がしばしば、数学者が算出して定めた機械よりも良い機械をつくるからといって、解析学が非難されてもよいのでしょうか。」<sup>(16)</sup> ここでは自然哲学と経験諸科学とが対比され、解析学または数学者と粉屋とが対比されているのだが、問題は両者の関係をどのようにとらえるかである。

ここでプレスナーは明らかに、自らのア・プリオリなものへの着目を自然哲学および解析学または数学と重ね合わせるとともに、経験科学および粉屋が作る機械と対比しているのだが、われわれの理解では、解析学とは実在的な対象なしには存在しえず、ここでいう粉屋の作る機械の存在を前提し、この実在的な諸関係を数学的な理想化の手続きをへて析出された純粹で理想的な関係であって、その意味では決して無条件にア・プリオリではありえないと考えられる。プレスナーのいう生物学的なア・プリオリなるものも、これと同様に、生物学的諸素材という経験的なものを前提して、そこから析出される理想的な関係というように理解しなければ、実在的な対象抜きのア・プリオリなものを承認するという観念論に陥ることになってしまうであろう。プレスナーが強調する、経験を可能にするア・プリオリな諸条件なるものに、こうした種類の観念論的な逆転を許す可能性がないとはいえないように思われる。

## ② ア・プリオリなものからの構成主義の嫌疑

こうした方法論思想と関係して次に、プレスナーの生物学的議論が著しく構成主義または演繹主義へと傾斜していることがあげられよう。彼は、生命の外見的特性を示すにすぎない「指示的な本質諸徴表」と生命が前提してその根拠となっている「構成的な本質諸徴表」とを区別して、後者がア・プリオリなもので、「有機的な自然の構成的な諸徴表の基礎および原理」<sup>(17)</sup>にはかならないと解釈する。そのさいのプレスナーの主たる関心は、ここでも経験または経験科学と哲学とを切り離し、そのうえでア・プリオリな本質諸徴表に着目し、そこから構成的・演繹的に生命哲学と人間学の体系を理論化しようとするところにある。つまりプレスナーは、生物学的経験とは独立に、おそらくは直観的な作用によって、生物学的経験を可能にするア・プリオリな諸条件が把握されれば、このア・プリオリで構成的な諸徴表と諸条件から生物学的経験と哲学的生物学の基本内容が構成的・演繹的に導出されると見なしているように思われる。しかしわれわれは、プレスナーが『諸段階』なかで掲げているいくつかの図式と事例のそれな

りの有効性をたとえ承認するとしても、これらの図式と事例とが、あくまでも経験的な生物学の諸素材を眼前に置いて、そのうえで分析的思考の働きによってこれらから偶然的・攪乱的諸要因をはぎとって純粹で理想化された関係として析出されたものであって、その逆ではないと考える。その逆を行く方法的手続きがあるとするれば、それは実在の対象と照応することのない、または照応することを必要としない、観念論的な方法論とならざるをえないであろう。

プレスナーは自らの人間学を「自然の哲学」「生物学の論理学」「有機的なものの公理論」などとさまざまに言い換えているが、彼の人間学が、経験的な諸事実の収集とそこから帰納的に導かれる一般的法則へと進む経験科学とは反対に、経験が気づかずに前提している生命の本質的な諸徴表から生命哲学と人間学の構成へと進むというような上記の構成主義的な方法論的な立場を取るかぎり、先に述べたア・プリオリなものへの固執と相乗作用を起こしかねず、そのためにプレスナーの哲学的人間学と自然科学、とりわけ生物学との間には、依然として解消されることのない乖離と断層が残り続けるように思われる。

### ③ 生物学的議論の時代的な制約

すでに述べたように、プレスナーの生物学的な議論にかんする個々の局面では、当然のことながら当時の時代的な制約を強く受けている箇所が見られる。ここではその代表的な箇所だけを指摘しておこう。

プレスナーは、生命あるものが自らの境界＝限界をもち、周囲環境に対して位置を取るという、それ自体としては正当な本質的特徴から出発しながら、生命あるものの基本的な活動をこれらの本質的特徴から導き出そうとするあまり、例えば老化と死をも生物一般が境界＝限界をもつことに結び付けようとした<sup>(18)</sup>。しかし、現代の生物学・医学では老化と死のメカニズムの解明がかなり進んでおり、有性生殖を行わない生物を繁殖から見た場合、そしてある種の細胞にかんしても、基本的に不死であることが知られているし、老化と死も基本的には有性生殖にともなう固有の現象であることも分かってきている。したがって現在では、プレスナーのように、老化と死を境界＝限界に直結させるわけにはいかないのである。

またプレスナーは、シェーラーと同様に、有機的なものの段階系列という発想から、植物を動物の前段階または下位に位置づけたり、中枢神経系とこれにともなう感覚運動能力および意識の欠如を、動物と比較した場合の植物の「欠陥」と見なした。こうした考え方は、当時の生物学の発展段階からすれば疑う余地のない、時代に制約された社会的通念であって、生物界の最後で最高の段階系列である人間の目を通して、いわば擬人化する仕方でも植物よりも動物を人間に近い生物と見なして、これを植物よりも上位に位置づけるというものであった。進化論の立場に立つ生物学者にも、生物進化のプロセスからすれば植物は動物の前段階だという臆見が存在していた以上、この臆見から脱却することは当時としてはきわめて困難であったであろう。しかし、現代の植物生理学の研究成果から見れば、このような見方は植物の活動と能力にたいする過小評価以外の何物でもなく、現在は、植物と人間を含めた動物とは同じ生物としてその

メカニズムは基本的に同じだという基本的認識に到達しているといえよう。また現代の新しい生物分類学によれば、植物はモネラ界、原生生物界、菌類界、動物界と並び立ち、とりわけ進化のプロセスのなかで一定の段階以降は動物界とは独立した道を歩んだ、生物界の五つの王国の同等の構成員なのであって、動物界の「下位」に位置づけられるような生物ではないのである<sup>(19)</sup>。

さらにプレスナーは、動物の意識の発生基盤にかかわる問題領域で、動物が意識を遮断する外中心化の道を選ぶか、あるいは意識を強化する中心化の道を選ぶかのいずれかに分化する必然性を論じたが、そのさいに彼はその分化の原動力を適応と進化のメカニズムにではなくて、「有機的な組織化の閉鎖的な理念」が完成されているかどうかの相違<sup>(20)</sup>などというきわめて観念的な原理に求めたのであった。しかし、「有機的な組織化」の「理念」などは、プレスナーが拒否したはずのあのドリーシュの、生命の外部にあってこれら作用する神秘的な力としてのエンテレヒーの概念と同じように、少なくとも経験科学によっては立証も検証もされえない形而上学的な原理にほかならないであろう。ここには明らかに、生物進化という近代生物学の理論を知らずに、植物の無限に見える多様性を「原植物」という単一の起源から説明しようとしたあのゲーテを初めとするロマン主義的な自然哲学がこだましている。

そして、比較心理学の分野でもプレスナーは、ヴォルフガング・ケーラーのチンパンジー実験の意義を正当に評価しながらもなお、人間と比較した場合の彼らの達成限界を示す特徴として、「〈ここ一今〉への埋没」<sup>(21)</sup>、「否定的なもの」にたいする感覚の欠如<sup>(22)</sup>、「空虚の感覚の欠如」<sup>(23)</sup>、さらに「客観的事象 Sache」および「事態 Sachverhalt」<sup>(24)</sup>の意識がそなわっていないことなどをあげている。しかし、プレスナーのこれらの叙述が多くの問題を孕んでいるということは、彼がここで個別科学としての認知心理学の領域の只中に入り込んでいるにもかかわらず、哲学者としてのみ発言し、本来こうした断言を行うために不可欠な認知心理学の方法への配慮をどこかに置き忘れていたということである。彼が真にこうした主張を行うことができるためには、動物の内部世界に入り込むことができるという科学的な保証とこれを裏付けるための科学的な検証の方法の提示がなければならない。プレスナーは明らかにこうした必要条件と方法的な諸問題にかんして自覚しているとはいいがたい。そのかぎり、動物にたいしていわれない哲学的な先入見を押し付けていないという保証はどこにも存在しないのである。

#### ④ 進化論に対する否定的態度と無理解

プレスナーの生物学的議論の致命的な問題点は、「哲学的人間学」にぞくするそのほかの哲学者と同様に、人間を論ずるにあたって、生物にかんする進化論的な思考の枠組みをそもそも問題としていないということにある。生物学的な議論のなかで進化論的な思考の枠組みを放棄すれば、先に批評したように、必然的に「有機的な組織化」の「理念」などという著しく観念論的またはロマン主義的な自然哲学に行き着くか、または生物と周囲環境との「原初的調和」

などのようなきわめて目的論的な原理へと逆戻りせざるをえないことは明らかであるが、プレスナーの議論には残念ながらこれら両方の要素が見られる。もちろん、生物進化にたいするこうした否定的態度は、決してプレスナーだけのものではなくて、彼に大きな影響を与えたフォン・ユクスキュルや彼の師であるドリーシュなどの当時の代表的な生物学者でさえも例外ではなかったことを見れば、プレスナーだけを責めるわけにはいかないであろう。しかし、当時すでに、プレスナーと同じく広い意味での「生の哲学」にぞくするベルグソンが『創造的進化』などの著作のなかで進化論の立場から理論を展開していたことを見れば、やはりプレスナーの生物学的議論の限界は指摘されなければならないであろう。

そのうえわれわれにとってきわめて奇異に思われるのは、例えばプレスナーが一九六一年になってなお、「ダーウィニズムは、遺伝学や突然変異説や環境世界研究の側からの重大な異議にもかかわらず、一世紀を通じて自己主張することができた。形態を規定する力としての適応と淘汰にかんしては、今も昔も反論がなされている。……その根本理念である淘汰の全能を弁護する者はほんのわずかにすぎない」<sup>(25)</sup>と述べたばかりか、さらにこうした主張の根拠として「とうに過ぎ去った地質時代に発生して主導的であった大昔からの種が生き続けているという事実」<sup>(26)</sup>をあげていたことである。

このプレスナーの議論に含まれている大きな問題は、彼が遺伝学や突然変異説をダーウィニズムに対する有力な反証と見なして、これらが進化論に組み込まれるものだというを理解しておらず、したがって進化のメカニズムを基本的に理解していないということである。しかし、それだけではないのである。プレスナーが進化論にたいする反論の根拠としてさらに、大昔から生き続けている生物種の存在をあげていることは、彼自身、進化論とは生物が下等な段階からいっそう高等な段階への一方的な前進だとする理論だと理解していることを自ら表明するものである。こうした理解こそは、俗流ダーウィニズムかまたはプレスナー自身が言うところの「進化主義イデオロギー」でありこそすれ、ダーウィンその人の進化論ではありえないことは明らかである。ダーウィニズムとは本来、種内変異の存在、自然環境の変化、変化した環境への適応と繁殖の成功、その結果としての自然選択と新しい種の形成などの自然的な説明原理以外のものを主張しておらず、進化が一般にいっそう高次のもの、いっそう理想的なもの、いっそう完全なものに向かって発展し続けるなどという憶説をそのうちに含んではいないからである。進化論にとって重要なのは、端的に言えば、自然環境の変化に適応し、生きる糧を確保して、繁殖に成功するかどうかだけである。したがってわれわれは、プレスナー自身が本来のダーウィニズムを俗流ダーウィニズムと混同し、こうした混同のうえに立って進化論にたいして懐疑的ないし否定的立場を取っていたと解釈せざるをえないのである。

##### ⑤ 中心的な位置形式から脱中心的な位置形式への移行の可能性が断たれていること

いっそう重要な諸問題は、以上のようなプレスナーの生物学的議論の問題点とも深く内的に関連して、生命あるものの位置性または位置形式にかんする彼の理論のうちにも散見されるよ

うに思われる。すでに述べたように、植物が自らの栄養環境にたいして開放的であるのにたいし、動物がそれに対して閉鎖的であるということは、一定程度生物学的に確認される事実であるし、そのかぎり環境に対する植物の開放的な位置形式も、また環境にたいする動物の閉鎖的な位置形式も、生物の自然環境にたいする位置関係の在り方を指摘したのものとして、それなりの生物学的・哲学的意味をもつであろう。しかし、動物と人間の位置形式にかんするプレスナーの理論の問題点のひとつは、動物の中心性と人間の脱中心性との間の関係が硬直した本質的区別の関係としてとらえられていて、前者から後者への移行の可能性がまったく考えられていないことにある。もちろんこれは、プレスナーが進化論の立場に否定的であって、そのために生物の系統発生という視点を欠いていることによるものである。

たとえわれわれが動物の中心性、人間の脱中心性というプレスナーのカテゴリーを仮に受け入れるにしても、生物進化および系統発生という生物学の視点に立つならば、両者の間には自然史的な移行または進化のプロセスが存在したと考えなければならない。そしてプレスナーのように、動物の中心性と人間の脱中心性とを、決して固定的な区別として、本質的に異なったものとして切り分けてはならず、おおよその特徴づけとして妥当するにしても、幅のある、流動的なものとして考えられなければならない。そもそも系統発生的進化とは、ひとつの元となる種からの枝分かれとして後続の種が形成されたとする考え方のことであるから、動物、哺乳動物、霊長類、ヒト上科などとして同じ系統にぞくする種どうしの間には本質的で固定的な区別を想定することは、科学を踏みはずさないかぎり、不可能なのであって、両者は常に系統的な同一性のうえに種としての区別が成り立っているというように、同一性と区別との弁証法的連関という視点から流動的にとらえられなければならないのである。

プレスナーは、動物の中心性を端的に示す特徴として、動物が例えば時間・空間的な〈ここ—今〉に埋没してこれから身を引き離すことができないのに対して、脱中心性を本質的特徴とする人間はそうすることが可能だと主張するが、現在では動物行動学の研究によって、例えば多くの哺乳類といくつかの鳥類が厳しい冬期間を乗り切るために貯食行動を行うことが知られている。たとえこの行動の真の生理的なメカニズムがまだ解明されていないにしても、この行動は明らかに「未来」にたいするそなえとして意味をもっており、この動物が時間・空間的な〈ここ—今〉である現在に埋没してはならず、これをある程度は超えていることの証しである。そして他方では、脱中心的であるはずの人間のなかにも、例えば同じ「哲学的人間学」にぞくするエーリヒ・ロートハッカーが、本来反知性主義であるはずのゲーレンの人間観が人間を過度に知性的に描いていることを皮肉を込めてこう述べたように、「未来」のことなどほとんど思い出すことなく、〈ここ—今〉に埋没している者もいることを忘れてはならない。「人間は未来のために、例えば節約することができる。しかし、人間はいつもそうするとは限らない。諸君は実直な南部イタリア人にかんする私の話を思い出す。彼はささやかな賃労働をていねいに断ったのだが、その訳は、自分は昼飯はもう食べてしまったからであっ

た。彼は明日のことは心配しなかった。彼は、明日のために生きはしない野のユリのように生きていた。彼は、明る日が彼の食物をもってきてくれるだろうと考えていた。」<sup>(27)</sup>

人間の脱中心的な位置形式もまた、哺乳類全般ととりわけ大型類人猿との系統発生的連関という基礎の上に、人間の脳化および自己意識の形成と密接に関連して、動物の中心性から次第に脱中心性へと発展する進化のプロセスのなかで形成・獲得されたものだと考えられなくてはならないであろう。またそれは、人類の歴史的な自己形成とそのなかでの個人の自己形成との統一的で相互的な過程のうちで、自然史的・人類史的に形成されてきたものだと考えられなくてはならないであろう。だからこそ、中心性も脱中心性も固定的なもの・不変のものとして受け取られてはならないのである。プレスナーが動物の中心性と人間の脱中心性とを位置形式の本質的差異として切り離そうとするかぎり、動物と人間との間に現実に存在する共通性と差異性とのきわめて重要な弁証法的連関が彼の人間観からは遮断されてしまうことになる。論理的に考えても、中心性を前提して初めて、おのれがつながれている中心から離脱しようという人間の脱中心性が成立するのである。だからプレスナーの理論は、人間の脱中心的な位置形式の起源と由来とを説明することができない。プレスナーの人間論もやはり、究極的には動物と人間とが本質的に断絶した関係にあるという前提の上に成立しているのであって、この点では、「実践的知能」の点から見れば両者の間には程度の差異しか存在しないと見なしたシェーラーのあの観点からの後退を意味するであろう。

#### ⑥ 人間の脱中心性は「自己意識」によって説明されるのではないか

人間の脱中心性にかんするプレスナーの理論のもうひとつの問題点は、脱中心的な位置形式とそのほかの人間の本質的な諸規定との関係にある。彼によれば、動物が〈ここー今〉のうちに埋没して動きが取れないのに対して、人間は〈ここー今〉にたいして距離を取ることができるし、動物が自己と意識をもち、おのれの身体諸器官をつうじて周囲世界へと働きかけるとともに自らへと再帰的に環帰することができても、こうした自分を体験することができないのに対して、人間は自我と自己意識をもち、再帰的に環帰する自分を体験することができる。さらに人間は、内面性の背後に「消失点」または「眺望点」をもち、それゆえに自らの内部世界で演じられる場面の観客となっている。プレスナーにおいては、主として空間的なイメージによって表現されるこうした人間のすべての本質的な諸特徴と本質構造とは、動物とは本質的に異なった人間の脱中心的な位置形式がもたらしたものであって、決してその逆ではない。人間の外部世界・内部世界・共同世界への分裂も、共同世界の成立も、道具や文化的なものの創造や言語も、さらにはユートピア思想さえも、人間の脱中心性にもとづき、これによって形成されるというのである。プレスナーの位置形式にかんする理論の根本問題はここにある。

しかしわれわれは、プレスナーの人間学の諸カテゴリーを仮に受け入れるとしても、人間の脱中心性とそのほかの本質的な諸規定との関係を、プレスナーとは逆の方向で、例えば次のように考えることができはしないであろうか。

生物の系統発生的進化の立場から見れば、中枢神経系が一定の発達段階に到達した生物種は、環境に適応するプロセスのなかで中枢神経系の司令塔である大脳と意識とを強化する道を選択し、たんなる意識から人間の自己意識へといたるまでの進化をとげたのであって、その結果、人間は周囲環境・世界・同類にたいしても、きわめて限定された行動しかなしえない動物に比べてその限界をはるかに越えた能力を手に入れ、広い行動範囲と生産的な創造をなしとげることができるようになったことは言うまでもない。したがって、動物の中心性にたいする人間の脱中心性という特徴付けが妥当することを認めるとすれば、こうした中心性から脱中心性への移行は、動物の意識から人間の自己意識への進化の所産であると理解されるべきであって、決してその逆ではないであろう。言い換えれば、プレスナーの言うように、人間が自我を手に入れ、外部領野・内部領野・意識への分裂のなかで、自らの背後にある「消失点」または「眺望点」としておのれの内部世界で演じられる舞台の「観客」となっているのも、外部世界・内部世界・共同世界への分化を可能にしたのも、さらには道具や文化的なものの創造や言語をさえも可能にしたのも、数百万年という生物進化のスパンから見ればきわめて短期間におよそ三倍も増加したという人間の顕著な大脳化とその産物としての自己意識の形成のおかげであって、例えば時間的・空間的な〈ここ今〉の束縛から離脱したり、自らの中心に距離を取ったり、自らの無根性を自覚して宗教世界に救済をもとめたりしうる根拠としての脱中心性もまた、まさしくこの大脳化と自己意識との所産にほかならないであろう。

つまるところ、プレスナーが主張する人間の本質の特徴も、上記の心的構造も、そしてまた人間学的諸法則も、ほとんどすべてが人間の「自己意識」から説明できるのであって、人間の脱中心性もまた例外ではないと思われる。プレスナーの脱中心性の理論における主要な問題点は、彼が人間に、周囲環境に対して人間が取る脱中心的な位置形式のゆえに、人間の精神や自己意識が可能なのだと思なしている点にある。しかし、われわれが今述べてきたところによれば、人間の脱中心性と自己意識の関係はむしろまったく逆に考えられるべきであって、脱中心性が原因および根拠となって自己意識が成立するのではなくて、自己意識が人間にそなわっているからこそ人間に脱中心的な行動様式が可能になったのだと考えるべきではないであろうか。

そう考えるならばわれわれは、フォン・ユクスキュルの環境世界説とドリーシュによる植物と動物の周囲環境にたいする開放性・閉鎖性という考え方を初めとする生物学説から大きなインパクトを受けて着想されたと考えられるプレスナーの位置性の理論もまた、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルを經由して形成されてきたドイツ古典哲学におけるいわゆる自己意識の理論をそれほど大きく超え出ているわけではなくて、むしろこうした広い意味での自己意識の哲学的伝統のなかにはっきりと位置づけられると言わなければならないであろう。

#### ⑦ 人間学的還元主義または人間学主義の危険性

ところで、こうしたプレスナーの人間学もまた、人間の活動と達成のすべてを人間の脱中心



的な位置形式へと還元しようとする傾向を強くもつがゆえに、人間学還元主義または人間学主義と形容すべき要素をそなえていることを指摘しておかなければならない。例えば、何度も指摘するように、プレスナーによれば、自己意識に到達した人間は自らの背後に「消失点」または「眺望点」をもち、自らの内部世界という舞台上で演じられる場面を眺望する観客となっているとされるが、人間のいわば身体的なこうした構造を可能にしたものは、脱中心的な位置形式にはかならない。また、人間の内部世界・外部世界・共同世界への分裂も、精神を可能にしたものも、そして人間学的諸法則として総括されるような、自然物に働きかけてこれを人工物として変化させる自然的技巧性や文化の創造や表現性も、さらには言語でさえも、そして認識論的な問題にかんして素朴实在論と観念論とに分裂した状況を作り出すのも、歴史を創造したり、おのれの虚無性を自覚して宗教的世界に救済を求めることも、さらには現実の社会を拒否してその彼方にユートピアを求めることすらも、すべて人間が周囲環境にたいして取る構造形式としての脱中心性にもとづいている。人間にかかわるほとんど一切のことが、主として個人の場面に比重がかけられた、人間の脱中心性という構造形式から説明されるのである。しかし、ここでわれわれは、人間の活動と達成のほとんどすべてを統一的に説明しうる原理原則とは、固有の対象がもつ固有の論理をほとんどとらえることのできない抽象物となりうる可能性があることを疑ってみる必要がありはしないであろうか。

かつてプレスナーは、彼の著作の『笑いと泣き』で、自らの人間学の思想の核心的な部分について簡潔にこう述べたことがある。「脱中心的な位置は同じように、例えば発話という天賦の才能と衣服への要求（それゆえに裸であるという概念と意識）とを、あるいは直立の姿勢や宗教的な意識を、あるいは道具の使用と装飾にたいする感覚を可能にする。」<sup>(28)</sup> 「脱中心的な位置のうちに提示されているのは、人間の本質諸徴表と独占物が（意味からして）切り離しがたく結合して現象する形式的な条件である。」<sup>(29)</sup> しかし、例えば分節化された言語は、確かに人間固有の所有物であるにしても、一定の社会性をそなえた生物に不可欠である社会的コミュニケーションの必要から生ずる前言語的な諸形態との連続面を無視することはできないし、人間の場合、とりわけ自己と他者との社会性と共同主体性に根差した言語的なコミュニケーションの必要性を捨象して言語を語ることはできないであろう。また例えば、宗教におのれの魂の救済を求めたり、現実社会を拒否してこの世に存在しない場所であるユートピアにかんする思想をあの世界に求めたりするのも、その人とその人が存在し生活する社会的諸条件とのかわりから生ずることは言うまでもない。

それにもかかわらず、これらのそれぞれ特殊できわめて複合的な問題局面を、人間の身体的な位置性や構造形式一般から説明するだけでは、何ものをも説明しないか、それぞれの対象がもつ特殊な問題局面と諸条件をほとんど捨象して語るか、あるいはこれらのことによって個人と社会的諸条件との軋轢から生じている事柄を暗黙のうちに正当化するかのいずれかになるう。この後者の人間学的正当化の傾向は、とりわけゲーレンの制度論、すなわち社会制度を、

その内容の如何を問わず、「欠陥生物」としての人間のいわば「代償」として、生物学的に必然なものとするあの理論において先鋭なものとなり、またそれゆえにイデオロギー的批判の対象となっているものである。プレスナーの場合には、それほど責任が重いというわけではないにしても、ここに、ハーバマスを初め、レベニース、ノルテ、キャロル＝ハーゲマン・ホワイトらによる人間学批判の理論的根拠がある<sup>(30)</sup>。

いかなるものであれ、われわれの認識の対象となるものは固有の次元と固有の論理をもっているのだから、その固有の次元と論理とがすぐれて解明されなければならず、これらが人間の、しかももっぱら個体としてとらえられた人間の構造形式や位置性のたんなる一般論に還元されるだけではとうてい不足であろう。そして、これにとどまらず、そのことが、きわめて複雑な社会的・イデオロギー的諸関係のもとでは、場合によっては、一定の社会的出来事のたんなる暗黙の正当化という悪しき役割を果たすことになりかねない危険性が常につきまわっていることを忘れてはならないであろう<sup>(31)</sup>。

#### ⑧ 「脱中心性」概念はさらに科学化されなければならない

プレスナーの人間学の根本概念である人間の脱中心性のカテゴリーが人間特有の諸現象を分析するさいに一定の有効性をもつ概念であることはすでに述べた。そのことを評価したうえで、われわれはさらにこうも問うことができる。脱中心性とはあくまでも哲学的な概念であって、科学の概念が要求する検証可能性から見ればどのように評価されるであろうか、と。プレスナーが言うように、人間の自我または自己意識の世界が人間の脱中心的な位置形式によって空間的な構造をもった世界として描かれ、そのなかの「消失点」または「眺望点」が人間の共同世界と人格と精神とに関係するとすれば、こうした人間の心的構造なるものは、はたしてどのようにして科学的に検証することが可能であろうか。

プレスナーが自らの脱中心性の理論を叙述しようとして、空間的なイメージを強く意識し、これに頼って説明しようとするほど、この問題はあのフロイトの深層心理学の理論が含んでいるのと同様の問題点、すなわち、人間の心的装置または人格構造を空間的・トポグラフィ的に論じて、これが自我と自我を支える広大な無意識的なエスの世界からなるとし、さらに自我が前意識と外界に接する心理的・身体的過程とからなるとみなした概念図<sup>(32)</sup>の検証可能性と同様の問題点を避けては通ることができないであろう。検証可能性をもたない限り、いくら優れた理論といえども、たんなる仮説にとどまらざるをえないことは明らかである。

プレスナーの哲学的人間学の中心概念においても、哲学と科学の距離と断層は依然として埋められてはいないのである。(完)

2004年1月7日

注 (1) Max Scheler, Die Stellung des Menschen in Kosmos, Scheler Gesammelte Werke, Band 9, Bouvier, S. 13.  
 (2) Plessner, Grenzen der Gemeinschaft, Gesammelte Schriften V, Suhrkamp, S. 12.  
 (3) Vgl. Plessner, Selbstdarstellung, Gesammelte Schriften X, Suhrkamp, S. 329. プレスナー自身の回想

- によれば、彼は『諸段階』の原稿が完成した時点でシェーラーから自分の学説を剽窃したのではないかと  
の嫌疑をかけられたのだが、これを心配したニコライ・ハルトマンが『諸段階』の原稿をシェーラー  
に見せ、これを読み上げて、この嫌疑を晴らしてくれたという。シェーラーにとっては、プレスナーの  
『諸段階』はまさしく彼が自分の弟子筋と見なしていた人物のなかからの「突然のライバルの出現」で  
あったに相違ない。
- (4) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, Gesammelte Schriften IV, Suhrkamp, S. 10-11.  
(5) Ibid., S. 11.  
(6) Ibid., S. 18-19.  
(7) Plessner, Die Aufgabe der philosophischen Anthropologie, Gesammelte Schriften VIII, Suhrkamp, S. 40.  
(8) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 82.  
(9) 人間の肉体, 身体, 心の三重のアスペクトの交差と統一にかんするプレスナーの現象学的考察と初期  
のサルトルおよびモーリス・メルロ＝ポンティの思想との類似については、プレスナー自身が『諸段階』  
の第二版序文のなかで「収斂現象」としてこう語っている。「サルトル, とりわけ彼の初期の著作, そ  
してメルロ＝ポンティにおいては, しばしば私の定式化との驚くべき一致が見られる。だから私は, 彼  
らがひょっとしてやはり『諸段階』を知っていたのではなかったかどうか, ただだんに疑問に思っただ  
けではすまなかった。しかし, 同様のことはヘーゲルの場合にも起こっていたのであって, もし仮に私  
がヘーゲルに依拠しなければならなかったとすれば, 依拠したところに対応する箇所が当時の私には知  
られていたことであろう。だが, 実際はそうではなかったのである。収斂現象というものはいつも他人  
からの影響に起因するとはかぎらない。世間では, 人が考えている以上のことが考えられているもの  
のである。」(Plessner, ibid., S. 34.)  
(10) Plessner, Lachen und Weinen, Gesammelte Schriften VIII, Suhrkamp, S. 12.  
(11) Vgl. Jean Piaget, Introduction à l'épistémologie génétique, Presses Universitaires de France, tome I ~ III.  
ジャン・ピアジェ『発生的認識論序説』第I ~ III巻, 三省堂を参照されたい。  
(12) Plessner, Lachen und Weinen, S. 12.  
(13) 奥谷浩一「プレスナーの哲学的人間学における位置性の理論(1)」(『札幌学院大学人文学会紀要』第66  
号) 13頁以下を参照されたい。  
(14) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 158.  
(15) 奥谷浩一「プレスナーの哲学的人間学における位置性の理論(2)」(『札幌学院大学人文学会紀要』第68  
号) 60頁以下を参照されたい。  
(16) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 35.  
(17) Ibid., S. 158.  
(18) Ibid., S. 58ff.  
(19) 例えばマルグリット・シュヴァルツ『図説生物界ガイド・五つの王国』日経サイエンス社, を参照され  
たい。  
(20) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 320.  
(21) Ibid., S. 360ff.  
(22) Ibid., S. 340.  
(23) Ibid., S. 342.  
(24) Ibid., S. 343.  
(25) Ibid., S. 431.  
(26) Plessner, Die Frage nach Conditio humana, Gesammelte Schriften VIII, Suhrkamp, S. 145.  
(27) Erich Rothacker, Philosophische Anthropologie, Bouvier Verlag, S. 149.  
(28) Plessner, Lachen und Weinen, S. 244-245.  
(29) Ibid., S. 245.  
(30) Carol Hagemann-White, Legitimation als Anthropologie, 1973, W. Lepenies/H. Nolte, Kritik der  
Anthropologie, Carl Hanser Verlag, 1971, Jürgen Habermas, Philosophisch-politische Profile, Suhrkamp,  
1971などを参照されたい。  
(31) われわれが人間学的還元主義または人間学主義と呼ぶものは, 個人と社会的諸条件とのあいだのコン  
フリクトまたは社会的諸条件そのもののうちに発生原因をもつもの, 例えば戦争や大量殺戮などを人間  
のもって生まれた本質から説明することで, 暗黙のうちにこれらを正当化してしまう傾向のある人間学  
的理論のことである。その代表的なものとしては, 例えばコンラート・ローレンツの攻撃性の理論(『攻

撃』みすず書房)やE. O. ウィルソンの社会生物学の理論(『社会生物学』[最終章] 思索社, 『人間』 思索社)などがあげられよう。ローレンツは人間による戦争や大量殺戮などは動物から遺伝的に人間に受け継がれた攻撃本能に由来するとし、E. O. ウィルソンもまた例えば家庭内分業や同性愛でさえも遺伝的に決定された人間の社会的本能によるものと見なしているからである。

- (32) 人間の心的装置または人格構造を図式的に示したものとしては、フロイト「自我とエス」(『フロイト著作集』第6巻, 人文書院, 273頁), 同じくフロイト『続精神分析入門』(『フロイト著作集』第1巻, 同上, 273頁)を参照されたい。

### Positionalitätstheorie in philosophischer Anthropologie Plessners (6)

OKUYA, Koichi

#### Abstract

Despite spending many years under the influence of Max Scheler, Helmuth Plessner blazed a path that differs from Scheler's, establishing a philosophical anthropology of his own. This anthropology was based on Plessner's special knowledge of biology, with his assertions being drawn from great expertise. Plessner's theory was unprecedented, since it addresses the whole of the living world and the phenomenon of life from the viewpoint of "position form" of that life in its surroundings. Plessner's theory, developed in the same year Scheler published his celebrated *Die Stellung des Menschen in Kosmos*, attempts to explore various problems only in the living world, beyond metaphysics. This contrasts with Scheler, who was searching for the essence of man and the essential difference between man and animals in the principle of a "spirit" transcending the living world. This distinction deserves greater recognition. Plessner's theory can be considered a valid perspective even today. It holds that out of lives that have boundaries and dual-aspectivity, plants take an "open position" to their surroundings, whereas animals take a "closed position" and man takes an "excentric position."

However, Plessner's methodology seems to be caught in a pitfall of inconsistency. Despite taking an empirical biological approach to philosophy, his perspective continues to deal with a-priori existence, i.e., the conditions that enable an organism to experience life. The methodology has another problem, in that it includes constructivism and deductivism. More importantly, there are fatal cracks in the theory, since it includes assertions that cannot be verified by today's comparative cognitive psychology and that contradict evolutionary theory. For example, the limitations of his era's biology cause Plessner to rank plants lower than animals, and to define animals as being more limited than man because of their confinement in the in terms of space and time (the "here and now") and their lack of senses that allow a reaction to the negative. Besides these methodological issues, there are problems with the concept of the "excentric positionality of man," since it is regarded as fixed and there is no possibility of rising from the centrality of animals to the excentricity of man. Another problem is his thesis that man is able to have a "self" and "self-identity" as well as a "vanishing point" or "viewing point" in the depth of his inner self since one's self-identity has the position form of excentricity. The theory runs contrary to rationalism. That is, the excentricity of man is realized by encephalization acquired in the evolution of man and self-identity derived from that encephalization. Comprehensive evaluation of Plessner's anthropology becomes possible only after the above explanation.

Keywords: Grenze, Doppelaspektivität, Zentralität, Exzentrität, Anthropologismus

(おくや こういち 本学人文学部教授 哲学・倫理学専攻)